



学術講演会開催報告

2009年2月20日

立命館大学言語教育情報研究科

立命館大学 大学院 言語教育情報研究科は、文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」(大学院 GP) 授業の一環として下記のとおり講演会を開催しました。

日時： 2008年12月23日 (火曜日) 15:00~17:00

会場： 立命館大学 東京キャンパス教室 2

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー 8階

講演講師： 東 照二 立命館大学 大学院 言語教育情報研究科教授

(米国ユタ大学教授兼任)

講演題目 「ウインク、ファーストネーム、そして微笑み： アメリカ大統領選挙と
言語コミュニケーション学」

成果：

最初に、松田研究科長からの挨拶のあと、津熊副研究科長から言語教育情報研究科の「大学院教育改革支援プログラム」の概要の説明、プレゼンテーションがありました。続いて講師の東 照二教授から、以下のような内容の講演が行なわれました。

「ことば」の機能には大きく分けて「リポート・トーク」と「ラポート・トーク」があること、また言語を分析する場合には、「フレーム」という概念が重要であることが話されました。「フレーム」の実例としては、公聴会に自家用ジェット機で乗りつけて、世論の批判をあびたために、今回は自動車で出かけて、うつむき加減に運転手の隣に座っていた写真が話題となった GM の CEO の場合が取り上げられました。今回の講演の中心テーマであるアメリカ大統領候補討論会では、まず「副大統領候補」の討論会が 70000 万人もの視聴者を集めたこと、その背景に、政策的な知識に乏しい共和党副大統領候補のペイリンさんが、番組後の CNN の世論調査では「より好感をもてる」という、項目で高い数字を出したことなどが紹介されて、彼女の政治家らしくない非常に庶民的な言葉の使い方や微笑、ウインクが、1つの重要なフレームを作っていたことが紹介されました。

続いて、大統領選挙ディベートについては、マケインさんが終始オバマさんの方を見ないで、握手するときも、オバマさんは、両手を支えながら相手の方へ近寄っている感じですが、マケインさんは、別のところを見えています。東先生は、これが「フレーム」なのです、これが「ことば」なのです、と指摘します。オバマさんの「フレーム」は、非常に“presidential”、“engaging”、“cool”で、かつ“passionate”ですが、マケインさんの「フレーム」は、“angry”、“frustrated”、それから“attacking”、“negative”で

あったと分析されます。更に、相手への呼びかけでも、マケインさんは、事もあるうに“*That one*”といっています。これはとにかく名前も言いたくないような時に使う、非常に失礼な言葉です。オバマさんはマケインさんに“*Senator McCain*”という言葉も使いましたが、“*John*”とファースト・ネームで呼びかけていました。非常に心理的な親近感、つまり「暖かさ」「親しみ」「フレンドリー」といった感じが出ていることは明らかでしょう。東先生の話は、両候補の使う語彙や表現の違い、キャンペーン戦略の違い(オバマ候補の携帯電話によるテキスト・メッセージに対して、マケイン候補のロボコール)にも触れて、オバマ候補が非常に *Inclusive* なスタイルを使っていると分析します。政策とか課題のようなものを論じるだけが言葉ではない、言葉を通じて、我々はその人の人間性、我々とその人の関係を感じる、このことが一番大きいと思います、というのが東先生のまとめでした。

今後の事業への反映：

言語教育は、単に文法的に正しい言葉の使い方を教えるだけではありません。「ことば」の持つちからを正しく理解し、コミュニケーションの手段としての「ことば」の使い方を教えることでもあります。アメリカの学校では、年少時の段階から、すでにみんなの前で話をすることを授業の一環として取り入れています。一方的な語りやレポート・トークではなく、聞き手をひきつけ、共感を呼び起こす話し方を身につけることもまた、言語教育の重要な部分ではないでしょうか。言語教育情報研究科の大学院 GP プロジェクトとしては、今回の講演の趣旨を踏まえて、今後もさらに言語コミュニケーション学分野の知見を深め、言語教育に組み込んで行きたいと考えています。